視角

# 子どもの視点に立つということ

友定啓子

## 1　子どもという弱者

「〇〇の視点に立つ」という時、その〇〇には多くの場合、相対的弱者が入るように思います。その最も代表的なものとして子どもが挙げられます。つまり、その関係の中で相対的な強者が、弱者の視点に立つと言明していることになります。相手の視点を意識的にもたないと、相手を損なってしまうという自戒と危機感がそこにはあります。本質的には対等でありながらも、現実的には力関係がある状態の時に、課題になってくるのではないかと思います。

幼児は私たちにあからさまに抗議してくることはありません。保育室が一年中同じ、園庭はただの吹きさらしで何年も変化がなくても、何も言わずに受け入れます。保育者の指示には従うものだと多くの子どもは思っていますし、時には子どものほうが保育者の意図を察して動いてくれたりもします。家庭で放置されても虐待されても、自分が悪いのだと思うことさえあります。ある意味絶対的な弱者でもあるといえます。大人は、自分の行為が幼児にどんな意味をもつのかを検証されずに生活できてしまいます。教育の場は、子ども支配という危険をはらんだ空間でもあります。まずは、そのことへの自戒として「子どもの視点に立つ」ことが必要なのだと思います。保育者は善意の人ですが、その「善意」をあえて検証するもう一つのまなざしをもつ必要があるだろうと思います。

## 2　幼児という異質な他者

幼児は、感情と感覚で動き、言語での応答も十分

ではありません。すでにその世界を通り過ぎた大人にとって、その異質感は大きいものがあります。自分の思考と感覚・感情、言語が通用しない相手でもあります。幼児は大人にとって理解困難な相手といえます。

幼児の世界は、過去に確かに経験した世界でありながら、多くの場合、それは意識の底に埋もれてしまっています。学生たちがはじめて幼児の表現に触れた時に「想像力が豊か」とよく感動していますが、自分たちの過去への共感や自由感、安堵感があるのかもしれません。幼児にとっては、現在の自分たちの文法でとらえているだけなのだと思います。それが大人にとっては好ましいと感じられ、異質な世界に触れるおもしろさになるのでしょう。しかしその一方で、自分たちと異なる文法が、不可解さやいら立ちの原因になることも多くあります。事ほどさように他者理解、異文化理解は自己中心的なのだと思います。

私たちは、幼児の感覚的世界を何らかの形で意識化しなければそれを受け入れることができません。もちろん無意識的な身体感覚などの感覚的な了解も可能でしょうが、多くの場合、言語化や再現行為など何らかの形で意識することによって、はじめてその意味を受け入れることができるようになります。その意識化の作業がまた大人にとっては別の意味をもつのではないかと思います。それは、人が自我の支配をいったん解き放ち、自己の世界に近づく作業にもなります。幼児を理解しようとして、幼児の感覚に近づこうとすることは、結果的に自己のもつ身体感覚や感情、無意識の再生作業にもなり、その意味で、大人の自己生成作業にもなります。とりわけ、幼児の遊びに寄り添う時は、その子どもと自己に出会う瞬間になるのではないでしょうか。

またその一方で、幼児のもつ苦しみや悲しみ、悩みに出会うことも多くなります。その重みは幼児だからといって決して軽いものとは言えず、むしろその幼さを思うがゆえにより重く感じられるのではないでしょうか。その苦しみや悩みに寄り添うことは、

幼児と共振する自己を見つめることになり、共生的な関係へとつながっていくのではないかと思います。その時にも、理解不能な他者への畏敬を忘れないでいたいと思っています。

## 3 「主体であること」を侵さない

保育において最も主要な課題は子どもの自己を育むことであると私は考えています。それはある意味おこがましいことでもありますが、子どもの視点に立つと言うとき重要なことは、子どもが「主体であること」を侵さないということではないかと思います。私は、子どもに対して支配的であることを警戒しています。相手を自分の思うようにしようとすることは、相手の主体を損ないます。自分であることが許されないのは、エンジンもハンドルも抜き取られた車のようなものです。それだけは何としても避けたいという気持ちがあります。

具体的な場面で、幼児が自分なりに判断して動く時、その子らしさに出会い、信頼できる瞬間は何だかとてもうれしいものです。そのために必要な情報や技能はある程度子どもに伝えていかなければならないと思います。特に生活の仕方については、この文化に適応してもらうために、一つひとつ教えていかなければならないことも多々あるでしょう。子どもの視点に立つということは、子どもがこの世界に出合い、世界にかかわりながら自己を生成していくことを認めることではないでしょうか。そこでの困難に大人として寄り添い、支えていくことはできます。寄り添うとは、前には出ず、荷物の端にそっと手を添え、相手の歩みを認めていくことだと思います。

子どもの生活の場は、そこにいる子どもたちが安心していられ、それぞれの思いが撚りあい、絡み合いながらダイナミックに展開していく場です。子どもは保育の対象でもあるのでしょうが、それ以前に子どもは一つの生活体であって、それぞれに変えることのできない固有の歴史をもっています。それらを背景に場の個性が生まれてきます。保育者によっ

て正しいことが行われる場ではなく、いつでもなにがしかの偏りや課題をもっているのが自然なのだと思います。

私たち大人が、子どもという他者と協同して生きていくためには、自己の中に他者を苦しくない程度に自由に住まわせる必要があります。

## 4　大人と子どもの共生の場を創る

最後に少し逆説的ですが、保育の場は、保育者にとっても居心地のいい空間であってほしいと思います。保育室の一番いい所に自分の机を置くのは論外ですが、子どもたちも保育者も自分たちの居場所だと心地よく感じられるようであってほしいと思います。やはり園庭には木々があり、花があり、そこにいろいろな命がいて、季節ごとに変わり、恵みを受け、それを分かち合うことができるように、一緒に何かを作れるように、そういう生活ができる場が必要だと思います。幼児のための安全策やかかわりを促す仕掛けはあるにしても、子どもが真剣に向かうことのできる手ごたえのある懐の深い環境が必要です。保育者も保護者も地域の人々も同じようにその魅力を享受できるようにと思います。子どもも大人も、それぞれの視点で生きる実感を味わうことのできる共生の場を創っていくことが、「子どもの視点に立つ」ことにつながるのではないかと思います。大人の描く子どもにしていくことに汲々とするのではなく、日々の生活の傍らで、子どもがいつも自分でいられるように、そのために大人も自分自身でいられるような場にする必要があります。その上で具体的な場面では、互いに折り合っていくことの繰り返しではないでしょうか。

子どもは、世界に出合いながら育つ人としての魅力をもっていて、それが大人との関係の基盤でもあり、大人が生きることを支えてくれていると思います。

（山口大学教育学部）